

所属・資格 心理学科・教授

申請者氏名 内藤 佳津雄

研究課題		高齢者の知的機能の継時的推移に関する研究
報告の概要	研究目的 および 研究概要	わが国における21世紀の高齢者像は20世紀の高齢者像とは変化している。例えば、国立長寿医療センターが行った長期縦断調査(NILS)において高齢者の知的機能について、WAISを用いて測定した結果が公開されており、その結果を再分析すると2000年と比べて2010年では年代別平均値平均値は年齢で5~10歳の若返りが生じていた。また、東京近郊A市における高齢者へのランダムサンプリングによる調査では、2004年と2015年の2回の調査におけるデータを比較すると、認知機能および生活機能の自己評価について、同様の若返り現象が認められた(内藤・北村,2017)。本研究では、A市データを用いて、高齢者の知的機能や認知機能の継時的な変化についてのデータ分析をより精緻に行い、高齢者の認知機能や知的機能に関連する生活上の要因等について明らかにすることを目的として、文献研究及びデータの再解析を行う。
	研究の結果	A市における2004年(N=865)と2015年(N=608)のデータセット(N=1473)を用い、改めて、認知記憶機能の自己評価尺度(20項目)の下位尺度の構造を検討した。①因子分析(最尤法・プロマックス回転)により、6因子(表情認知、近時記憶、遠隔記憶、符号化、忘却しやすさ、展望記憶)を抽出した。因子負荷量(回転後の因子パターン)が0.400以上の項目をその因子への所属項目として選定し、下位尺度としての信頼性を確認したが(表情認知2項目、近時記憶5項目、遠隔記憶2項目、符号化2項目、忘却しやすさ3項目、展望記憶2項目)、展望記憶についてはアルファ係数が0.50となり、尺度としての信頼性が低いことが示されたが、その他の下位尺度については0.71~0.84であり、一定の信頼性が得られたと考えられた。 ②外出頻度(週2回以上・以下)社会的活動への参加(月1回以上の参加の有無)に対する認知記憶機能の下位尺度との関係を明らかにするために、認知記憶機能の6つの下位尺度と性別、年齢を説明変数としたロジスティック回帰分析を行った。その結果、外出頻度については年齢と表情認知、社会的活動への参加については性・年齢と表情認知と符号化において有意な偏回帰係数が得られた。
	研究の考察・反省	分析結果から、認知記憶機能のなかでも表情認知と符号化の自己評価が高齢者の社会的活動の程度に関係していることが示唆された。 5歳刻みの同年代について2004年データと2015年データを比較すると、認知記憶機能の合計点では2015年の方が上昇していた(内藤・北村,2017)。しかし、改めて本研究で抽出した下位尺度を用いて再分析を行うと遠隔記憶では2015年データの方が低下しており、また5歳刻み年代別で見ても年齢とともに上昇する傾向が得られ、他の機能への自己評価と異なる結果が得られるなど、認知記憶機能別に再評価する必要があると考えられる。また、外出や社会的活動への参加に対して、性と年齢で統制しても、特定の認知記憶機能の自己評価が相関していることが明らかとなった。どちらが原因であるか結果であるかは本研究では特定できないが、社会的活動の促進において留意すべき認知記憶機能であることが示唆された。
研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	研究発表 学会名 発表テーマ 年月日/場所	※この欄は、本報告書提出時点で判明している事項についてご記入ください。 現在のところはなし (さらに詳細な分析を行う必要があるため、令和2年度に論文として発表する予定である)
研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	研究成果物 テーマ 誌名 巻・号 発行年月日 発行所・者	